



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	<第5回研究会>コミュニティ・ドックとは何か
Author(s)	西部, 忠
Citation	地域経済経営ネットワーク研究センター年報, 3, 68-70
Issue Date	2014-03
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/55211
Type	other
File Information	REBN3_068.pdf



＜第5回研究会＞

コミュニティ・ドックとは何か

西部 忠

本報告はコミュニティ・ドックとは何かを説明し、その意義と課題について論じた。

コミュニティ・ドックとは、コミュニティ（地域の住民、各種団体、企業、行政からなるアソシエーション）が主体となって自発的、内発的な町づくりを実行・支援するための新たな政策手法として著者たちが提案するものである（西部、草郷 2012, 2010）。

日本では1960年代以降、定期的な（年1回の）総合的健康診断が「人間ドック」という呼び名で広く実施されてきた。これは、医師が病気の早期の発見・治療を行うための診断手法だが、同時に、受診者が自ら健康状態を再確認し、病気を予防するための気づきや動機を得るプロセス評価手法にもなっている。コミュニティ・ドックは、人間ドックのこの側面に着目して、人間ドックのコミュニティ版として着想された。人間ドックとコミュニティ・ドックには自己点検や自己修正を含むという類似性があるが、主体である人間とコミュニティには大きな違いもあるので、両者の異質性も看過できない（表1, 2）。

コミュニティ・ドックは、総合的で内発的なコミュニティ開発支援ツールであるとともに、それをサポートするための情報を提供するための調査研究手法である。それは、客観的な地域生活基礎



データや主観的な当事主体評価データを用いて、コミュニティの変容を計測し、必要な制度設計や政策を提示する。さらに、コミュニティ・ドックは、コミュニティによる自己評価と自己修正というプロセス評価を含む。したがって、その具体的流れは、1. 調査研究主体が地域の経済社会についての総合的検診を定期的実施し、2. 住民や諸団体・組織からなるコミュニティに地域のあり方を報告するとともに、政策・制度設計の提案や働きかけを行い、3. コミュニティが問題を認識・評価し、自らそれを改善する、となり、このプロセスが繰り返される（図1）。

コミュニティ・ドックは新たな政策観に基づいている。図2の左に描かれた従来型の政策観で

表1 人間ドックとコミュニティ・ドックの同質性

人間ドック	コミュニティ・ドック
1) 医師による診断・治療	1) 研究者による調査分析・政策提言
2) 医師による問診 （医師と受診者の対話） + 受診者による自己点検・ 自己修正 →自己意識、自己制御	2) 研究者による結果報告 （研究者とコミュニティの 協働ワークショップ） + コミュニティによる自己点検・ 自己修正 →自己意識、自己制御

表2 人間ドックとコミュニティ・ドックの異質性

人間ドック	コミュニティ・ドック
1) 医師と患者（受診者）の主客関係、医師による病気の一元的、客観的な診断・治療	1) 研究者とコミュニティの協働関係、研究者とコミュニティによる問題の多元的、共同主観的な診断/報告・解決/政策
2) 自己点検・自己修正する主体＝患者（受診者）の単一性	2) 自己点検・自己修正する主体＝コミュニティ（住民、団体、企業、NPO、行政）の複合性



1. 初めに、行政、団体、組織、企業などの政策主体が経済社会の望ましいあり方を発現しうると考えるメゾレベルのプラットフォーム制度（外なる制度）を設計する〔メディア・デザインⅠ〕。



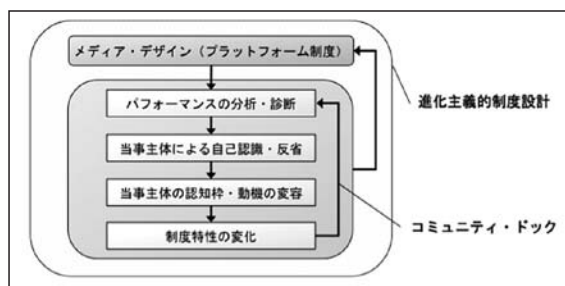


図3 メディア・デザインとコミュニティ・ドック
(出典：西部 2012)

2. その制度のもとでコミュニティを構成するミクロの主体が生活し活動していくが、調査研究者が生活や活動の集計結果であるマクロレベルのパフォーマンスを分析・診断する〔コミュニティ・ドックⅠ〕。
3. マクロ・パフォーマンスの結果をもとにして、コミュニティ（住民、企業、団体、NPO、行政からなる）がコミュニティの現状について自己評価や自己修正を行う〔コミュニティ・ドックⅡ〕。
4. 以上のプロセスを通じて、各当事主体の内なる制度（認知枠、動機、価値意識）が変容する〔内なる制度の変化〕。
5. その結果、外なる制度の特性や効果が変化する。同じ外なる制度のもとで、再び実践が行われ、同様のプロセスが繰り返されていく。このようにして、コミュニティ・ドックが主体の行為（ミクロレベル）—制度（メゾレベル）—パフォーマンス（マクロレベル）という3つのレベルの間にループを形成する〔外なる制度の特性・効果の変化〕。
6. 何度も繰り返されるループの中で、コミュニティに蓄積されていく各種の経験や知見がプラットフォーム制度（地域通貨等）の設計へフィードバックされて現行制度の一部で微調整が行われ、そうした経験や知見が一定限度を越えた時、ルール的全般的変更を伴うプラットフォーム制度の再設計が行われる〔メディア・デザインⅡ〕。

新制度の下で1～6が繰り返される。このよう

に、進化主義的制度設計ではメディア・デザインとコミュニティ・ドックは入れ子型に統合されて実行される。プラットフォーム制度の遺伝子型をデザインして、所望の機能や特性を間接的に実現する「メディア・デザイン」の下で、地域コミュニティが主体となって包括的な自己評価・自己治療を行う手法が「コミュニティ・ドック」である（西部 2006, 西部 2012, 西部, 草郷 2012）。このように、進化主義的制度設計は地域通貨のより望ましいデザインを提示する規範的な応用政策論を展開し、コミュニティ・ドックはその中に組み込まれるのである。

参考文献

- 西部忠・草郷孝好（2010）「進化主義的制度設計と地域ドック」江頭進・西部忠・他編『進化経済学基礎』日本経済評論社、266-274。
- 西部忠*, 草郷孝好*（*第一著者）（2012）「コミュニティ・ドック-コミュニティの当事主体による制度変更型政策手法-」『進化経済学論集』（進化経済学会）16: 505-528。
- 西部忠（2006）「地域通貨を活用する地域ドック—苫前町地域通貨の流通実験報告から—」『地域政策研究』（地方自治研究機構）34: 40-56。
- _____（2012）「コミュニティ通貨のメディア・デザインとコミュニティ・ドック：進化主義的制度設計による新たな政策論の展開」『Discussion Paper, Series B』（北海道大学大学院経済学研究科），100: 1-13。